兵庫県現代詩協会 会報43号

２０１８年７月１５日 発行:たかとう匡子

◇第二十二回定期総会報告

第２２回兵庫県現代詩協会総会が、５月６日（日）午後１３時３０分より、今回は場所を西宮市に移し、西宮市民会館で開催された。

たかとう匡子会長挨拶に引き続き、司会の高谷和幸により、当日出席会員数３８名、委任状７３通で計１１１名と報告され、会員数の３分の１の数が満たされていることを確認し、総会は成立。議長選出が行われ、今村欣史会員を選出。その後、左記の議事が提出された。２０１７年度活動報告、決算報告、会計監査報告、２０１８年度活動方針案、２０１８年度予算案をそれぞれ、事務局神田さよ、会計野口幸雄、会計監査報告を梅村光明が述べた。

今年度活動計画は次の通り。

1．総会
2．ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご
　１０月１４日（日）ラッセホールにて１３時より１６時まで。講師伊藤比呂美氏、対談　伊藤比呂美氏×平田俊子氏
3．ポエム＆アートコレクション
4．読書会　年２回
5．文学紀行
6．アンソロジー発行
7．役員選挙
8．会報発行　７月・１２月
9．名簿発行
10．ホームページ開設

また、今年度活動方針の内、アンソロジーについては担当の大橋愛由等が、ホームページ開設については、担当の北野和博が詳しく説明し提案をした。全て、承認された。

最後の議事、「規約改正」については、提出した文言に不備があるため、来年度総会において再度検討することとなった。この規約改正については、会員の条件として、兵庫県在住、兵庫県で活動している者のみという制約があるが、範囲を広くして、より多くの会員が入会できる目的であった。文言については、継続討議ではあるが、考え方としてはこれから入会する方に適用することで承認を得た。議長今村会員は退任し、第２部講演会に移った。

司会は丸田礼子。講演は大橋愛由等氏により「沖縄詩が撃つもの　詩・言葉・思想」と言う演題で沖縄の言葉について話が繰り広げられた。途中、大西隆志がバンジョーを弾きながら山之口獏の詩を歌う場面もあった（講演内容は次ページ）。

続いて第３部。自作詩朗読会となる。自作詩朗読者は次の７名。尾崎美紀・北岡武司・工藤恵美子・中嶋康雄・瑞木よう・山本眞弓・山下輝代。

閉会の挨拶を副会長時里二郎が述べ、そのなかで、本協会の様々の催しへの会員の方がたの参加を促した。今年度の詩のフェスタは伊藤比呂美氏をお呼びしているが、興味深い著書が多数あるので、読むことをお勧めする。また、他の人の詩を読むことにより、自分の詩に新たに向き合うことができるのではないか、とお話された。

１６時３０分に終了、その後、市民会館隣の職員会館の「くすの木」で、司会の神尾和寿のもとに和気藹々と懇親会の時間を過ごした。

総会出席者、青木左知子・尾崎美紀・大橋愛由等・江口節・梅村光明・朝倉裕子・大西隆志・今村欣史・安西佐有里・神尾和寿・工藤美恵子・香山雅代・季村敏夫・かただときこ・和比古・北岡武司・神田さよ・北野和博・佐藤勝太・関はるみ・坂本久刀・時里二郎・田中信爾・高谷和幸・たかとう匡子・月村香・野口幸雄・永井ますみ・中嶋康雄・にしもとめぐみ・西海好子・福岡映子・牧田榮子・丸田礼子・瑞木よう・山本眞弓・山下輝代・渡辺信雄。会員外で高木敏克。以上３９名。（文中敬称略）

懇親会出席者　２２名。

（報告・神田　さよ）

たかとう匡子会長挨拶

今村欣史議長

総会　第２部　講師・大橋　愛由等
演題　『沖縄詩が撃つもの　詩・言葉・思想』
講演趣旨

５月６日（日曜日）に西宮市民会館で兵庫県現代詩協会の総会があった。これはその時の大橋愛由等氏の「沖縄詩が撃つもの－詩・言葉・思想」という講演のレポートと、私的な感想を交えたものです。

大橋氏は阪神淡路大震災から毎年続けている奄美への生命回帰ともいえる旅を続けてきた。その大震災の経験が今回の沖縄の広い意味で詩・言葉・思想に複雑に入り組んだ根底に通底するものとしてある。そこからは「わたしの言葉、そして詩って何？」という問いが絶えずなされてきたと想像される。そしてその問いはわたしたちにとっても警鐘となるものであるし、気づきを起こさせるものだった。

まず、当日配られた資料から、沖縄戦後詩をめぐる状況から。「沖縄戦・焦土化（まま）米軍政府とのあらがい」「琉球大学に依拠する詩人たち」「反復帰闘争・復帰後の幻滅・自律の模索」「詩の自律・個の風土への縦深化」「状況氏詩をめぐる論争」と順を追いながらの話があった。情報として多すぎてそれを一言で振り返ることは不可能であるが、（スマフツ）という母語の、それも一概には言えないのだが、数多くの島や地方で醸成されたそれぞれの異言語をいかに大切にしてきたか、それが日本語の表記となるように強制された時にいかに精神的な崩壊にまで及んでいるか、であったと思う。資料には高良勉や山之口獏などよく知られた詩人のほかに、新川明、川満信一、清田政信、中里友豪、新城兵一の詩が取り囲み一つの視覚的な宇宙を形成していることも注意を促したい。

二枚目の資料には現代沖縄文学の思想、情念の力学、信念の力学など岡本恵徳、清田政信の著作物のコラムの紹介。二面には山之口獏研究から知念榮喜、仲里効、岡本恵徳の著作物のコラムの抜粋があった。「山之口獏の彷徨（さすらい）は近代社会へのあらがいであり、かつ沖縄人（ウチナーンチュ）として日本と日本人との距離をまさぐる詩的営為であった」、と大橋自身のコメントが挿入されている。ここで小休止となり、常任理事の大西隆志が山之口獏の「生活の柄」の詩にフォークシンガーの高田渡が曲を付けた歌を、バンジョーの伴奏により歌っている。

三枚目の資料には見出しとして「沖縄の詩人たちは本土（ヤマトウ）の詩人と異なる位相で詩と言葉に向き合っている」あるように、南海日日新聞に掲載した大橋愛由等のコラム全文と松原敏夫詩集『ゆかいなブザのパリアー』の書評がのっている。ここにきてようやく大橋自身が自分の言語、自分の詩を念頭に置きつつ沖縄の詩人たち、沖縄の文化・思想に係ってきたかが語られているように思う。

講演の内容を時系列に並べてみたが、私としての感想、気づきがどこにあったかを書いて締めくくりたい。言葉を、まして自分の言葉を言葉として自覚することは困難なことであるが、詩を書くという差し迫った状況の中で言葉と向き合うだけでなく、その出自となる言葉を考えることは詩を考えるところの段階で、自覚的に唯一できる詩への一歩であるのではないかと思う。そのきっかけを与えてくれた貴重な講演であった。

（高谷　和幸）

講師略歴

大橋　愛由等（おおはしあゆと）神戸市生まれ。詩人・俳人・編集者・FMわぃわぃのDJ、スペイン料理店店主、出版社代表。多才な顔をもつ。図書出版「海風社」を経て独立し、図書出版「まろうど社」設立。詩誌「Melange」同人、「エクリ」メンバー。句誌「吟遊」「豈」同人。著書に『複数の沖縄』（共著・人文書院）、句集『群赤の街』。雑誌・新聞などにルポや評論を執筆。詩集『明るい迷宮』（発行・書肆風羅堂）で「芸術文化団体・半どんの会（現代芸術賞）」受賞。

上・大橋愛由等氏の講演。沖縄への思いは熱い。

右・大西隆志氏がバンジョーを抱えて「生活の柄」を歌った。

左・総会での会場風景。熱心に講演に耳を傾ける参加者たち。

◇第十三回読書会
生誕九十九年黒田三郎の一生に寄り添う
二〇一七年十二月二日 県民会館
チューター 野口 幸雄

まずチューターの野口幸雄氏の自己紹介から始まる。ご自身の著書『妻が出かけた日』と詩誌『風の音』について語られ、詩を書き出したきっかけはフォークソンググループの「赤い鳥」が歌った「紙風船」に影響を受ける。その後「紙風船」の詩を書いた黒田三郎に傾倒していく。野口幸雄氏は四十年も前にフォークソングの詩も書かれてレコードも出されたようだ。又まだ詩を書き始めて六年だそうだ。

野口幸雄氏は黒田三郎の詩を細かく分析し解剖するのに二十数冊彼に関する本を読んで今回の読書会に挑まれたようだ。実に細やかに講演されて分かりやすく黒田三郎の功績をあらためて知らされた次第だ。

黒田 三郎（くろだ さぶろう、一九一九年（大正八年）二月二十六日ー一九八〇年（昭和五十五年）一月八日） 広島県呉市出身。呉海兵団の副団長であった父・勇吉（海軍兵学校第二十一期）の退役に伴い、三歳からは、父の故郷・鹿児島で育つ。東京大学 経済学部卒業。戦時中、会社から派遣されたり現地召集で南洋の島々で過ごした。戦後 はＮＨＫに入局し、一九四七年、詩誌「荒地」創刊に参加し、詩や評論を発表する。 結核の 闘病を続けながら、市民の生活に根ざした感情を平明な言葉で描いた。

以下黒田三郎の詩を朗読しながらエピソードと持論を展開され語られた。黒田三郎が十八歳の時北園克衛のＶＯＵに参加して「け罌し粟」を発表。それを朗読。二十三歳で大学を卒業すると民間人としてジャワに行き銃を持つことなく知識人として現地で暮らす。引き揚げてきてから詩のスタイルも変わりひとりの人間が自分の目で見、自分の耳で聞き、自分自身で感じ、自分自身で考える、自分の体験したものだけを詩にすると言う信念に傾いていく。

黒田三郎が二十八歳の時出版した詩集『ひとりの女』空前の大ヒットになる。そのひとりの女こそ黒田三郎の妻である。「ぼくはまるでちがって」「それは」を朗読。『失われた墓碑銘』から「ああ」。『小さなユリ』から「夕方の三十分」「ぼくを責めるものは」を朗読。五年間に六編しか詩を書かなかった時期の詩集『渇いた心』から「引き裂かれたもの」婦人雑誌に書かれた『もっと高く』から「海」をそれぞれ朗読。四十九歳の時上梓した詩集『ある日ある時』から「ある日ある時」を朗読。詩集『羊の歩み』から「誕生日」と「日常」を朗読。五十歳の時 ＮＨＫを退局後書いた詩『悲歌』から「風邪をひいて」を朗読。六十歳の時急性肺炎で入院したとき上梓した『死後の世界』から「死後の世界」朗読。

最後に大西隆志氏が「紙風船」を歌い終了。

黒田三郎は荒地派の詩人だが田村隆一や鮎川信夫、北村太郎等と違い社会派で生活詩や民衆詩を得意としている。その当たりを野口幸雄氏は実に丁寧に細かく黒田三郎を人間のドラマとして話された。

黒田三郎を読むと言葉の使い方がシンプルでその当たりからも明快さとやさしさが伺える。黒田三郎の詩の朗読と説明で人間黒田三郎も見えてきた。質疑応答も含め意義ある二時間で野口幸雄氏の講演によってあらためて黒田三郎の真骨頂と新発見を見た気がした。

（植村 孝）

◇読書会の予定・講師について

詩のフェスタに向けて、講師・伊藤比呂美の詩についての読書会を7月28日（土）13時～15時、私学会館301号で開催。チューターは**寺田 操**氏。1948年、神戸市生まれ。87～08年「而して」「エピュイ」「関西文学」の編集に関わる。主な著書に、評論『対なるエロスー高群逸枝』(砂子屋書房)、『恋愛の解剖学』（風琳堂）、『金子みすゞと尾崎翠ー一九二〇・三〇年代の詩人たち』(白地社)等。個人誌『POETRY EDGING』発行・編集。読書会への出席については同封の葉書で参加を申し込んで下さい。締切は**7月25日(水)**まで。

◇第5回文学紀行報告
須磨寺と周辺の散策を楽しむ

二〇一八年三月一八日。

午前十時半、輝く空の下、須磨寺駅に集合。駅をでると、平重衡とらわれの松があったという遺跡の由緒書きをみる。出発時間を待ってそれを読んでる人がほかにもいた。やがて参加者もそろい、わがパーティーは緩やかな坂道を歩きはじめる。

道を挟んで商店が並ぶ。「あの寿司屋は旨い」などと、通りすぎる店を品評しながらのんきに歩く。「弘天さん」を脇に見て交差点を渡ると、右手に「須磨霊泉」が湧いている。案内役のたかとう匡子さんは震災の時、ここまで水を汲みにこられたとか。透明な水が豊かに湧いては、きれめなく流れていく。仁王門にたどり着くまでに、須磨寺らしからぬ施設ができているのを見て、「あれっ！」と感嘆符を心の中に発した。そこは朱塗りで、建物もいかにも安っぽい。パンテオンを漢字に直したような名称にも驚いた。驚きは門を入ってからも連続する。神社のような朱色の建物がいくつもある。マニ塔もどきがあちこちに作られ、寺院の屋根にはネパールかチベットの映像で見る赤や黄色の布でできた吹き流しが春風にはためく。外国人向けの日本の土産物屋を思い浮かべた。案の定、「ここ、外人を連れてきたら喜ぶで」と悪態をつく人がいる。まことにそうなのだ。おかげで境内は僕らが十代の頃とは比べものにならないほど繁盛している。半世紀前にあった遺跡も元通りあった。ただ、昔よりもこぎれいになっていた。首洗池も昔はこんなに透明ではなかった。きれいになるのは結構なことだが、周りがひどく俗っぽい。

それはそれとして須磨寺に尾崎放哉や、読むたびに泣かされる山本周五郎も縁があったとは、十代のガキは知らなかった。あの放哉が九ヶ月もここにおれたかと、不思議な気がした。山本周五郎は二三歳の時『須

磨寺附近』という短編を書いたとか。これが文壇処女作となったという。関東大震災の難を逃れ、離宮前で暮らすようになっていたらしい。たかとうさんのご案内で、そういったことも知りえた。まことに「先達はあらまほしきことなり」。さらに説明をうかがいながら、各所を見学した。「青葉の笛」の碑の前で皆さん唱和しておられた。晴れた春空の下、いい気分が辺りに広がる。人が声を合わせて歌うのはすばらしい。残念ながら筆者はこの歌、学校で習わなかった。

誰かがお地蔵さんに願い事をする。どこかのお嬢さんはこのお地蔵さんにお願いして、大学に合格したとか。鐘を衝く。鐘の音がグワーンと響き、大阪湾を越えていく。次々に衝く。その音のようにのどかな昼前のひと時をすごす。再び須磨寺駅から山陽電鉄で須磨浦公園へ。鉢伏中腹のホテル花月のレストランから、須磨の海を見下ろす。向こうにかすかに伸びる紀伊半島がみえる。空は晴れ、暖かさに木々の枝が緩みゆくを眺め、ビールを飲み、語りあい、昼食。最初から気持ちは緩んでいたが、一段と緩んだ心で食事をいただく。食後、徒歩で、やはりあれこれ話しあいながら須磨浦公園駅におりた。まことに翳りも屈託もなき一日だった。

（北岡　武司）

－兵庫県現代詩協会の文学紀行参加会員－
※今後も楽しい文学紀行や散策の企画を予定していますので、希望の文学に纏わる名所・旧跡がありましたら、ご連絡頂ければ幸いです。今後もご期待下さい。
担当は玉川侑香常任理事です。

2018 ◇第7回ポエム＆アートコレクションの報告

1月16日(火)～23日(火)

■例年通り、神戸文学館で1月16日から23日まで開催された。出品数は少し増えたため、展示スペースが窮屈になったが、26点の作品の出来は満足できるものであった。出品者21名は下記の通りである。

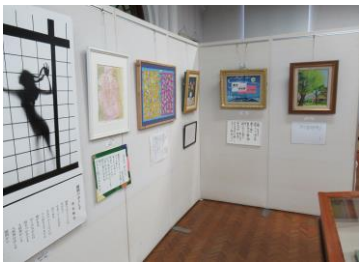
出品者　阿部由子（絵画）・大西隆志（絵画）
大橋愛由等（オブジェ）・和比古（絵画）
香山雅代（書）・佐藤勝太（書）
髙谷和幸（絵画）・玉井洋子（書）
玉川侑香（写真）・永井ますみ（写真）
中島友子（書）・西海ゆう子（絵画）
坂東里美（オブジェ）・福永祥子（絵画）
牧田榮子（人形）・松下玲子（絵画）
丸田礼子（色紙）・水こし町子（絵画）
望月逸子（書）・山本真弓（絵画）
由良佐知子（絵画）

■兵庫・詩の現在展　事務局に届いた会員の詩集・詩誌が展示された。

■特別イベント「兵庫・神戸を生きた詩人を語る Vol.5」
「竹中郁、神戸という風土が生んだモダニズム詩人」と題し、たかとう匡子会長が講演（1月20日14時―15時半）。このシリーズは、足立巻一、綾見謙、中村隆、君本昌久に続く五回目である。竹中郁は神戸に生れ住み、モダンな風土を詩の糧に新しい詩の精神を呼び覚まし、近代的なモダニズムの詩を書いている。講演では、時代の風をうまく背負って生きた竹中のモダニズムに焦点があてられていた。

モダニズムとは20世紀文学の一潮流であり、都市生活を背景にし、既成の手法を否定した前衛的な文学運動である。まず、リアリズム、抒情との対比でモダニズムにつき、各々の詩の背景についても述べられた。特に関西のモダニズムについては一味違う安西冬衛の詩と比較し、竹中のモダニズムを位置づけられた。

第1詩集から「庭」、「晩夏」などを取り上げ、さらにこの二つの詩に関しては情景説明とともに、いかにモダニズム的な詩であるかについて解説された。戦後に発行された第7詩集『動物磁気』の連続した短詩を取り上げ、第8詩集『そのほか』や第9詩集『ポルカマズルカ』などでは、その軌跡も簡単に紹介されていた。以上、竹中郁の人間的な魅力や、幅広い詩の創作のバックボーンについて、40名ちかい参加者の中には、メモを取られたり、講師の話に熱心にうなづかれていた。



※右左写真は会場雰囲気を知ってもらうためです。作品は11頁に掲載しています。

※左集合写真は第7回ポエム＆アートコレクション絵画の出品者です。絵画、書、写真、人形、オブジェなど多彩な作品は詩を感じさせてくれました。当イベントの担当は和比古常任理事、丸田礼子常任理事でした。

◇ポエム&アートコレクション講演より『竹中 郁、神戸という風土が生んだモダニズム詩人』

講演趣旨と感想　和比古

２０１８年１月２４日（土）神戸文学館
講師・たかとう 匡子

「兵庫・神戸を生きた詩人を語る」シリーズの、足立巻一、綾見謙、中村隆、君本昌久に続く五回目の講演である。

竹中郁は神戸に生れ住んで、モダンな風土を詩の糧に新しい詩の精神を呼び覚まし、近代的なモダニズムの詩を書いている。時代の風をうまく背負って生きた竹中のモダニズムに講演では焦点があてられていた。

モダニズムとは２０世紀文学の一潮流であり、都市生活を背景にし、既成の手法を否定した前衛的な文学運動である。まず、リアリズム、抒情との対比でモダニズムについて説明され、各々の詩の背景についても述べられた。特に関西のモダニズムについてその特徴を示された。また、抒情詩人とモダニズム詩人との違いを明らかにすることにより、モダニズムの位置づけをされた。モダニズムでも一味違う安西冬衛との比較論も展開され、竹中を育てた灘という地域で、日常性の分野、抒情詩の領域を深く自分の詩を溶かし込んでいる。

竹中の９冊の詩集を紹介し、戦後の昭和２３年の第７詩集『動物磁気』から第８詩集『そのほか』までは２０年間も空いていると指摘され、全詩集に関してもその経緯を述べられた。第１詩集から「庭」、「晩夏」などを取り上げ、特にこの二つの詩に関しては情景説明とともに、いかにモダニズム的な詩であるかについて解説がなされた。また、『動物磁気』の連続した短詩を取り上げ朗読解説された。『そのほか』などではさらなるモダニズムの変貌があり、その軌跡も簡単に紹介されている

一方、兵庫高等学校などの校歌などを多く書いたことで広く知られ、その詩を検証された。最後に、同じタイトルの草野心平の詩を引用し両詩の特徴を述べ、講演を終えられた。

以上、竹中郁の人となり、生き方、詩について概説された。約４０名の聴衆は熱心に耳を傾けていた。

◇ホームページの告知

兵庫県現代詩協会ホームページをリニューアルしました。http://hyogopoetstry.sakura.ne.jp/main/

■主なコンテンツ

・お知らせ・話題（協会からのお知らせ、協会外の情報も）
・協会の紹介（協会の歩み年譜や動画）
・会報（過去の会報の閲覧）
・会員の詩（アンソロジー閲覧他）
・会員の詩誌（詩誌写真紹介）
・活動計画と報告（イベント紹介・当日の様子）
・バラエティ（エッセイ・雑文等）

現状ではインターネット・エクスプローラやグーグルで「兵庫県現代詩協会」で検索すると、上位に表示されます。旧ブログも表示されることがありますが、ＵＲＬの途中に/sakura/の文字が含まれているのが新ホームページ、/jugem/の文字が含まれれば旧ブログです。またはお手数ですが、上記ＵＲＬで検索して、お気に入りに登録しておいてください。上記から内容は変更する場合があります。コンテンツは順次改善、更新させていきます。情報があれば最寄りの理事または北野までお寄せください。

（北野　和博）

連詩　**白秋**

Messier　グループ

草の葉に　露は零れ
いま　あなたはなにをなさっていらっしゃるのでしょう
いま　わたしは　詩集を編んでいます
ひたすら　無口な言葉を　みつめて
点滅しながらやってくる切片にむきあって
深淵を覗いている　わたしを　覗いて
高く　高く　季節を超えて飛翔するには

（香山　雅代）

花を散らし桜　葉をつける
毛細血管を張り巡らせていた巨木
空高く浅緑の新葉を覗かせる
天と地　緑を湧き起こし
万木千草　広大な宇宙を燃え立たす
人は佇む　座り込む
未だ目覚めざる命が萌える
言えないままに母　その母　ひい祖母
無明長夜に花茨咲く

（内藤　恵子）

曙とともに
近づき　やってくる便り
届けられる　平らな
凸凹を失くしたもの
すでに朧に
形も紅色も　滲んで

（佐伯　圭子）

カクカクと　空にむきあう
六甲の山なみ
山の端に　とけてゆく
陽の雫を　一気に浚って
鳥たちは　塒へ
羽風が　樹にとまり

（香山　雅代）

懐かしさは
胸郭を締めつけ
背骨を揺さぶってくる
秘密の葉っぱや
はかない色に滲む
水滴

（佐伯　圭子）

沙羅双樹に滴る雨しずく
話し声に揺れる
コーヒーの残り香
朝食のあと
部屋に残る遺影
通りすぎるたび
視線が迫ってくる
かすかな微笑をうかべて
はるかからの　便り

（内藤　恵子）

注記・詩誌「Messier」グループ
香山雅代　佐伯圭子　内藤恵子
五月二十二日起詩　五月二十七日挙詩
ＦＡＸ文章による

◇詩のフェスタ告知

県政１５０周年イベント
２０１８ふれあいの祭典ー詩のフェスタひょうご

主催／ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご実行委員会・兵庫県現代詩協会・兵庫県・公益財団法人兵庫県芸術文化協会

１０月１４日（日）１３時～１６時
ラッセホールサンフラワー　（神戸市中央区中山手通４の１０の８）

□第１部講演会・伊藤比呂美氏
　演題「カタる、ウタう、ノロう」
□第２部対談・伊藤比呂美×平田俊子
　テーマ「詩をいきるということ」
□第３部自作詩朗読会　ぜひご応募下さい。
　朗読申込は９月５日まで。申込多数の場合は抽選とさせていただきます。
連絡先・神田さよ　℡０７９８（５３）０６８６
（詳しい案内のチラシは８月に会員の皆様にお送りします）。

伊藤比呂美氏プロフィール

１９５５年東京生まれ。『草木の空』『テリトリー論』『河原荒草』など、身体に密着した「生きる」「死ぬ」を見つめて詩を書いてきました。９０年代、しばらく詩をやめ、カリフォルニアに移住したが、２００５年『河原荒草』で詩に復帰。語り物と現代詩を融合した『とげ抜き新巣鴨地蔵縁起』、動物や植物をみつめた『犬心』『木霊草霊』、古典からの現代語訳『読み解き般若心経』『新訳説経節』、切腹と鴎外（どういう組み合わせと思われるでしょうが・・）をみつめた『切腹考』、食エッセイのフリをした『ウマし』など、詩を書き続けています。２０数年の米国在住を引きあげて日本に帰り、現在熊本に住んで、早稲田大学で３年間の任期付きで教えています。

◇エッセイ
『尹東柱(ユン・ドンジュ)を巡る旅』

始まりは、随分と昔に読んだ茨木のり子作品だったと思うが、定かでない。それでも植民地から同志社大学へ留学、ハングルで詩を書いた、治安維持法で逮捕され獄死した等が、記憶の底に残っていた。現在も命日に詩碑の前で追悼会があり、宇治にも新しく詩碑が建ったと友人から聞いていた。昨年がちょうど彼の生誕百年にあたり、所用でソウルへ行った時、二〇一二年にできた「尹東柱文学館」を訪れた。隣国の近代史に興味があり、これまでに「戦争と女性の人権博物館」や「西大門刑務所歴史館」にも行っている。日本人には辛い場所だが、私には避けて通ることができない過去でもある。

文学館は地下鉄景福宮駅からタクシー七分程の距離で、駅からバスの便もある。入場料無料。元水道加圧場（水の流れに圧力を加え再び強く流れるようにする施設）で、館内は彼の詩に書かれた空や星を象徴するような雰囲気が漂っていた。日本語パンフレットには一世に疲れ、妥協しながら卑怯になった私たちの魂に尹東柱の詩は美しい刺激を与えてくれる。そして魂の流れを整えて新に流れるようにしてくれる。尹東柱文学館は私たちの魂の加圧場だーとある。水に関連して、詩「自画像」の井戸からモチーフを得て、使われなくなった水槽を上手に利用していた。定期的にＤＶＤも上映され、ハングルがわからなくても彼の生涯が理解できるようになっていた。入場者も多く根強い彼の人気がうかがわれたし、案内板には詩の朗読会のお知らせもあった。

戻って岩波文庫版詩集（金時鐘訳）を読み直し、民族詩人と言われているが、治安維持法で逮捕されるような詩とは、とうてい思えなかった。時を同じくして、生誕百年を記念した墓参りツァーに行った人の報告では、生地は現在中国吉林省延吉市、十九世紀末朝鮮から人々が集団移住した明東村(抗日地域)である。さらに彼がクリスチャンだったことも特高に目をつけられる理由だったらしい。丘の上の墓参りをした彼女は、墓を背にして向こうの山々の緑とふもとの村を見たとたん「天と空、風を感じた」とまるで詩人のような言葉を発したと記している。あの地にはそうした力があったのだと。

二十七歳の非業の死に、想像を掻き立てられる。彼をテーマに書き始め事情あって中断、一月のアート展は第一章のみで出品した。いずれと考えていた時、本会の大橋さんから追悼会に誘われた。二月の京都は厳寒、それでも二月十六日福岡刑務所獄死を想うと、まだ足りない気もした。ソウルから美術家が参加、「星を数える夜」（上野都訳）をアート作品にして詩碑の傍らに掲げ、自国の若い詩人の為に集まった人たちに、熱い労いの言葉をかけてくれた。献詩とフラメンコギターの献曲で、凝縮した時が流れて行った。彼は追悼するひとりひとりの中に確かに生きている、太陽でも月でもなく星として。私たちとは別に若い韓国人たちも訪れ、また花束も沢山捧げられていた。

彼の詩人としての評価はそれぞれに任せて、二十七年の生が、私たちにいろいろなことを語りかける。彼には私たちを書くことに駆り立てる何かがあって、それが今なお愛される理由かと思う。彼の足跡がまだ韓国にも残っている。日本で詩を書く者としてソウルに出かけ、ソウルの詩人達とコラボできたらまた新しい何かが生まれるのではないかと。出かけませんか、韓国は余りにも遠くそして近い国なのだから。

（西海　ゆう子）

※注記・西海ゆう子氏が参加された第６回〈日本・韓国・在日コリアン詩人共同ユン・ドンジュ生誕１００周年記念集会〉は、２月19日（月）に京都市上京区の同志社大学今出川キャンパス内の「尹東柱詩碑」前で開催された。尹東柱の詩作品の朗読などを行い。音楽演奏による追悼も行われた。

昨年からの動きとして、映画「空と風と星の詩人ー尹東柱（イ・ジュニク監督　2016）」が日本各地で上映されたり、尹東柱の記念碑があらたに宇治市志津川の新白虹橋（しんはっこうばし）のたもとに10月28日に建てられるなど、生誕百年にふさわしい一年になった。詩を書く立場として、尹東柱へのメッセージと作品を送り続ける集会でもある。毎年、入試の終わった今出川キャンパスはのんびりしていて、この尹東柱詩碑を目指して、韓国からの観光客や留学生が訪れ、そうした人たちにもその場で、追悼会に参加してもらい、交流が広まりました。

同志社大学今出川キャンパス内
「尹東柱(ユン・ドンジュ)詩碑

水町百窓のこと

季村　敏夫

水町百窓の作品は君本昌久と安水稔和が編集した『兵庫の詩人たち』（神戸新聞出版センター）に収録されている。本名藤井秀雄。生没年月日、出身地不明。昭和六年、大橋真弓らと神戸で詩誌『詩文家』を創刊、同年、詩集『水晶の家』、翌年に詩集『生活の一章』を佐藤惣之助が主宰する「詩之家」から刊行、とある。

非人称命題叢書の六冊目として詩集『自畫像』（装幀古賀春江）が昭和八（一九三三）年に詩之家（川崎市砂子一―二六）から出ている。作品「春光」を引く。

植物の上で風になる風
藤椅子の上に目覚めた午睡
幾万枚かの葉が目の中をキレイにする。

それから二年後、ペンネームをやめ、本名で詩作することを宣言。その事情を、京都の天野隆一が主宰する同人誌『青樹』（昭和十年二月）に書く。一部を引く。

自ら好み、自ら命名して、以来水町百窓として押し通して来たが、第一詩集『生活の一章』を終へ更に『自畫像』を世に出してより、愈々詩境に入るに従ひ、通信も頻繁になり、それに従ひ、通信の誤配も応々にあり又、詩友の往来にも不便を増すこと覚へ、尚又、あまりにロマンチックな名に嫌悪を感じ・・・

おやっとおもった。『生活の一章』が第一詩集、では、君本昌久らが記した『水晶の家』は何なのかと。次に藤井秀雄の作品「海」（昭和十年二月）を引く。

海底に夏があつた
すきとほる水の底に多彩な刺青の
季節が休息する
午後三時
ヨットの影は一本の樹木である
風が香水瓶を割る
海上に夏があつた
すきとほる空の上に多彩な刺青の
季節が休息する

敗戦後、製薬会社に勤務、俳句に転じ久保田万太郎らの『春燈』に作品を発表することになる。昭和五十二年大晦日に脳血栓で死去。西條八十らの『愛誦』（交蘭社、昭和九年三月）から、過渡的な作品を引く。

沙上のあとは消えてゐた
はてしなく失はれゆく
物の匂ひ
沙上のあとは消えてゐた
はてしなく失はれゆく
物の音

句集『羈旅』（春燈社、昭和四五年）があるが未見、日本近代文学館で閲覧した『春燈』から七句。

滝凍て一峡は研を失へり
穀象の隠るゝためにのみ歩む
蓑虫や孤独はときに詩をうましむ
満天星に蜂隠るゝをみとどけし
木蓮を領し了りし白果つる
大利根の河幅の夏没日かな
老銀杏黄を誇りつつ且つ散れり

俳句に携わるようになってからも詩人の交遊は続いていた、このこと、なぜかゆかしい。『春燈』（昭和四四年）のエセイで、不慮の事故で急逝した井上多喜三郎、天野隆一、岩佐東一郎らに触れ、「詩でむすばれた美しい友情」と書きとめている。

会員の詩集評

時里 二郎

あだちかつとし『記憶』(私家版)。自らの人生を振り返っての感慨や、家族のこと、さらにはテロや戦争への危惧を憂(うれ)う作品など、テーマは多岐にわたる。なかでも、但馬の海や、日本海と山陽を結ぶ播但線など、生活者の眼差しから紡がれたなにげない作品にひかれた。「父は泳ぎ方を教えてくれ／母は「塩水に浸かると風邪をひかない」と言った／塩の香りは快く／海は青く広かった／父も母もとっくに亡くなった／波は静かに寄せ陽光は白砂に照りつけている」(「海・一」より)詩集の底流に流れる哀感が切ない。

たかとう匡子『私の女性詩人ノートⅡ』(思潮社)。前作に引き続いて、石垣りん、石牟礼道子ら、彼女にとっては先輩詩人にあたる人たちから、彼女よりも若い平田俊子、小池昌代まで、12人の女性詩人が取り上げられている。あとかきにあるように、この詩人論は「戦後における女性詩人の登場が男性詩人より十年遅れてのスタートとなったのはなぜか」という問題提起から始められたものだという。それぞれの詩人について、個々の中心となるテーマをあぶりだし、さきほどの命題を踏まえながら作品を読み込みこんでいくのだが、何よりの特徴は、一貫してそれぞれの詩人の詩の方法的な分析 ―とりわけメタファーのありように強い関心をもっていること。ただ詩人論として読むだけではもったいない。本書は、詩を書く上での表現の問題から、詩を書く主体としての詩人のありようまで、実践的な方法論としても大いに有益なものをもたらしてくれるはずだ。なお、本書は、日本詩人クラブ詩界賞を授賞した。また現代詩文庫『たかとう匡子詩集』が上梓された。これまでのたかとうさんの詩の足取りをたどるうえでまたとない選詩集。

和比古『人間の構図』(ユニウス)。第五詩集。「人間社会において自らが望む構図を描いてみた」とあとがきにある。和比古さんの詩のよさは、なによりもその人間性の誠実さを疑いもなく信じることができるところにある。人間社会の不条理やゆがみを、人間の中に見出しつつも、それを克服することができるはずだという、揺るぎない強い思いを祈るように言葉に託す姿勢に心打たれる。ただ、いつも感じるのは、詩とともにある絵は、その向こう側にある世界を想像するおもしろさがあるのに、詩には、読み手が言葉の向こう側に想像する余地があまりないということ。詩が、自らの思想や思考の説明に終わってしまっては、物足りなく思う。詩には謎がなくてはいけないと常々思うところ。そういう意味では、クレーやマグリッドやデュフィーの絵に触発された作品には、読み終えてなおそこにとどまって読みを深めようとする思いに誘われる。

佐藤勝太『佇まい』(コールサック社)。なんと十五冊目の詩集。前詩集上梓から一年も経っていない。旺盛な創作意欲は驚くばかりだ。詩のスタイルはこれまでと変わらない。生きることに対する前向きな姿勢が、言葉をおのずと押し出していくような印象だが、そこにはただ生きることへの意欲ばかりでなく、現実の中に自分をしっかりと見定めている自画像や、社会や自分を取り巻く世界を見つめる人間観察などに、独特のユーモアや苦さがあって、詩集を重ねるごとにそれが確かな言葉の歩みを形作っている。

以倉紘平『駅に着くとサーラの木があった』(編集工房ノア)。以倉さんの選詩集。それも、乗り物やそれに関連する名詞の入った作品を集めた選詩集。H氏賞受賞の「地球の水辺」、現代詩人賞の『プシュバ・プリシュティ』、丸山薫賞を受けた『フィリップ・マーロウの拳銃』などから採られた珠玉の作品をこの一冊でよめるのはまことにありがたい。以倉さんの詩の見えないテーマは「時間」だと、かねがね感じていた。その詩の魔術は、人生のとある一時を、永遠の時間の層に映し込む技法にある。それは《ノスタルジアの詩学》とでも呼ぶべきもので、喪失のかなしみを記憶の沃野に溶かし込む心のいとなみと言えばいいだろうか。思い出すことはすべて失われて還ってこない。ただ、そのかなしみはいつまでも時間の海をたゆたい、詩はそれを言葉で掬い取って、かけがえのない時間の結晶として差し出されている。今度、「平家物語」をモチーフにした『沙羅鎮魂』の諸編を読んで、人の心のむなしさや、こまやかな機微を、浄化された美にまで描ききった、その文体(スタイル)の結構に瞠目した。

福田知子『あけやらぬみずのゆめ』(港の人)。「大きな落雷の跡に生まれた小さな水たまり／ひらいた掌は薄明りの仕種に似ていた／小さないくつもの水たまり／そのひとつにひらいた睡蓮の花びら／花びらの縁をひと筋の光が通り抜けた／そのとき光が小さく息を吹いたので／それが　母だと分かった」と始まる「母」は、珠玉の一編。カッティングされた小さな光を含んだ言葉の息づくような歯切れのいい第一連、それに続く第三連からの深い情感の流れに身を委ねながらも、魂の存在としての母を見つめきろうとする確かな言葉の佇まいにひかれた。骨折による母の入院をきっかけに作者の両親の日常は大きくゆがめられ、母の認知症の進行と、その母をひたむきに介護する老いた父の姿。そんな両親の命の揺らめきを見つめる日々のただ中で、東日本大震災とそれに伴う福島原発事故が起こる。災厄にさらわれていった多くの死者たちと、限りある生を生きる両親の姿とが、彼女に「魂」という「少し奇異で古めかしい」言葉を目覚めさせる。言葉では表すことができない魂が、同時に、言葉に触れることによって、はじめて息づくものであること。彼女はこの詩集で、そのことを実践してみせた。

山本眞弓『五月の食卓』(澪標)。25年ぶりの第二詩集。詩は、日常のなかから見つけ出すものではない。日常の皮膜に覆われて、隠れて見えないものを言葉で取り出すこと。皮膜を取り払って差し出すその手際が詩だ。山本さんの詩を読んでいると、そんなことを痛切に感じる。表題作の「五月の食卓」は、「青い風」や「緑の洪水」や「白い光」に包まれた五月の清々しい食卓に、斑のように陰影深く刻まれたふたりの人生のかけがえのない時間が映り込んでいる。その25年の間に彼女を駆け抜けていった、自分ではコントロールできない様々な出来事を、詩という言葉の眼差しで見つ

めきった手応えを感じさせる力のこもった詩集だ。阪神淡路大震災に触れた諸編や、師であった君本昌久さんに捧げられた詩も忘れがたい。

鳥巣郁美『時刻（とき）の帷（とばり）』（コールサック社）。長い詩歴をお持ちの鳥栖さんの十二冊目の詩集。心象のとめどない迷宮的な世界を、実に端正でみずみずしい言葉を紡いで織りあげている。「踏み音たてていた生の／片足をふと傾けて／とりまく薄暮のむこうを透かす／足早に積もる闇の無数を湛えて／ひとつの心を連れ去ってゆく日暮の帷（とばり）」（「日暮れの帷」）短い引用の詩句からもうかがえるように、たゆたうような心の動きが言葉に自然に乗り移って、読み手は実に心地よい言葉の音楽に酔ってしまう。作品を次々に読んでいると、時にむなしさ覚えてしまうような言葉の迷宮のなかに取り残されることがある。この心象のグラデーション。心の葉脈を刻むかのようなこまやかな心の行き来に、際立つような孤独感がのぞいているのも印象に残った。

◇常任理事会報告

■十一月三日第五回常任理事会、私学会館にて。常任理事十名出席。ポエム＆アートコレクション、チラシ検討他。次回読書会案内状送付及び参加者状況。場所は県民会館にて。文学紀行三月十八日、山陽電車須磨寺駅集合。須磨寺見学、昼食の件など。詩のフェスタ報告。参加者八十八名、朗読十八名。総会の日程について、五月六日十三時～西宮市民会館にて。ＨＰ作成についての報告。内容検討、制作協力者との打合せについて。

■二月四日第六回常任理事会、私学会館にて。常任理事十一名出席。ポエム＆アートコレクション報告。講演参加者三十九名、出品者二十一名。ＨＰ立上げ補足事項。総会に向けての打ち合わせ事項。講演は大橋愛由等「沖縄詩が撃つもの　詩・言葉・思想」。詩のフェスタ内容の検討、講演者の希望について。読書会アンケート結果報告。文学紀行下見報告、コース案の検討。現在十名参加希望。

■四月十五日第三十八回理事会及び第七回常任理事会、私学会館にて。総会に向けての最終検討。規約一部改正案について、進行案・役割分担など。決算報告書及び次年度予算案について。詩のフェスタ、十月十四日（日）十三時よりラッセホール。講演・伊藤比呂美氏、対談・伊藤比呂美氏×平田俊子氏。県政百五十周年特別企画のため拡充内容として講師二名の依頼。演題などは未定。ＨＰ五月開設に向けて最終報告検討
※文学紀行アンケート報告。アンソロジー「ひょうご現代詩集」２０１８（第十四集）の製作。出版についての検討。現在会員は１４３名。

■六月二日二〇一八年度第一回常任理事会、私学会館にて。常任理事十名出席。入退会報告・名簿についてと第二十二総会の報告。ＨＰ五月開設後の調整等の説明と、今後の展開について。アンソロジー「ひょうご現代詩集」２０１８（第十四集）の進捗状況について検討。八月中旬頃に募集をかけ、十月十五日（予定）を締切。読書会については「詩のフェスタ」の講師でもある伊藤比呂美氏の詩を知るため。チューターは寺田操氏。第８回ポエム＆アートコレクションは２０１９年一月十四日から一月二十二日、講演は一月一九日、神戸文学館にて。具体的な内容は今後の常任理事会において決めていく。文学紀行の日程は２０１９年三月十七日だが、内容は未定。次期２０１９年度は役員改選の年となっているため、十二月の会報44号発送時に選挙投票用紙を同封とする。年明けの一月上旬に締切とする予定。選挙管理委員会設置及び人選も今後行う。十月十四日開催のふれあいの祭典「詩フェスタのひょうご」のポスター・チラシのデザインの確認を行う。

◇事務局より

会員発行の著書、詩誌などの出版物は事務局へお送りください。詩に関するイベント等の案内もよろしくお願いします。会員の動静の連絡もお教えください。ホームページの充実を図るためにも、会員からの多くの詩についての情報をお待ちしています。

◇会計より

今年度の会費を同封の振込用紙でお納めください。
なるべく速やかにお願いします。年会費は４千円です。
郵便振替口座００９２０・９・１１１２４３
口座名　兵庫県現代詩協会
お忘れのないようによろしくお願いいたします。
前年度まで未納の方も速やかに納入お願いします。

◇会報担当より

会報へのエッセイや詩の投稿をお寄せください。また、会員の受賞や、活動報告などの情報も是非会報担当までお送りください。会報担当は大西です。どうぞよろしくお願いいたします。

大西隆志
〒670-0061　姫路市西今宿３－１－９－７０２
メールアドレス　furadou@extra.ocn.ne.jp
（どちらかに）　Furadou.t@gmail.com

◇新入会員をご紹介ください。

兵庫県現代詩協会のメンバーも高齢化を迎えており、会員の減少も今後予想されます。高齢は悪いわけでもなく、人生において詩歌の力や、創作への意欲は人生を豊かにしてくれます。当協会は詩に関しての幅広い活動も行っており、文学紀行などのお互いの交流を図るイベントもあります。詩を愛する方々の集いの場として、新たなつながりを願っています。

・担当の尾崎美紀・神田さよまでお知らせ下さい。
また住所変更、退会の会員は事務局までご連絡下さい

・連絡先・入退会担当／尾崎美紀　事務局／神田さよ

◇他団体の著書

三重県詩人集２５号（三重県詩人クラブ）
埼玉詩集第１７集（埼玉詩人会）
福島県現代詩集２０１７（福島県現代詩人会）
栃木県現代詩年鑑２０１７（栃木県現代詩人会）
宮城の現代詩２０１７（宮城県詩人会）
年刊詩集ふくい２０１７３３集（福井県詩人懇話会）
いわての詩２０１７（岩手県詩人クラブ）
第５回かなざわ現代詩コンクール受賞作品集（石川詩人会）
年刊歌集第５７集（兵庫県歌人クラブ）
群馬年刊詩集第４０集（群馬詩人クラブ）
呼吸１４３号（現代京都詩話会）
香川県詩集２０１７（香川県詩人協会）
千葉県詩集５０号（千葉詩人クラブ）
鹿児島県詩集２０１７（鹿児島県詩人協会）
秋田県現代詩年鑑２０１８（秋田県詩人協会）
島根県年刊詩集４６集（島根県詩人連合）
三重県詩人集２６号（三重県詩人クラブ）
呼吸１４４号（現代京都詩話会）

◇他団体の会報・詩誌

詩界通信　８０号～８２号（日本詩人クラブ　理事長　長尾雅樹）
日本現代詩人会報１４８号～１５０号（日本現代詩人会　理事長秋亜綺羅）
大分県詩人協会会報１５０号・１５１号（大分県詩人クラブ　事務局工藤和信）
すずかけ３６６号～３７２号（兵庫県芸術文化協会）
山形県詩人会会報３３号（山形県詩人会　事務局　松田達男）
とっとり詩人３７号（鳥取詩人協会　編集矢部公章）
島根県詩人連合会報　８３号・８４号（島根県詩人連合　事務局　山根）
岡山県詩人協会だより　２２号（岡山県詩人協会　編集重光はるみ）
兵庫県歌人クラブ会報１９８号（兵庫県歌人クラブ　安藤直彦）
いちご通信２０号（大分県詩人連盟）
福島県現代詩人会会報１１７号（福島県現代詩人会　齋藤貢）
第１回福島県現代詩集賞募集要項（福島県現代詩人協会）
埼玉詩人会会報８５号（埼玉詩人会北畑光男）
いしかわ詩人４５号（石川詩人会）
群馬詩人クラブ会報３０３号・３０４号・３０５号（群馬詩人クラブ）
関西詩人協会会報８８号・８９号（関西詩人協会）
宮城県詩人会会報２６号（宮城県詩人会　竹内英典）
茨城詩人協会会報２５号（茨城県詩人協会　硲杏子）
長野県詩人協会会報１３７号（長野県詩人協会詩人会　事務局井手ひとみ）
詩の会４１号（宮崎県詩の会会報　編集玉田一陽）
秋田県現代詩人協会会報５７号（秋田県詩人協会横山）
中四国詩人会ニューズレター４３号（中四国詩人会　事務局川辺真）
中日詩人会会報１９１号（中日詩人会　事務局宇佐美孝二）
福岡県詩人会会報１７０号（福岡県詩人会脇川郁也）
福井詩人懇話会会報９７号（福井詩人懇話会・事務局　千葉晃弘）
高知詩の会通信１８号（高知詩の会事務局　林嗣夫）
現代詩２０１８（日本現代詩人会）

◇詩集募集

・第２０回小野十三郎賞。対象は詩集または詩評論書。２０１７年７月１日から２０１７年６月３０日までに刊行されたもの。応募締切は２０１８年７月１０日（当日消印有効）。著者本人が著作二部を送付。選考委員は倉橋健一・小池昌代・坪内稔典。受賞は小野十三郎賞、賞金五十万円。送付・応募先は大阪市中央区谷町７-２-２-３０５　大阪文学学校内　小野十三郎賞事務局。詳細は０６-６７６８-６１９５まで。

・第２９回富田砕花賞。対象は詩集。ただし、翻訳・アンソロジー・復刻及び遺稿集・電子書籍等は除く。２０１７年７月から２０１８年６月末日までに刊行された奥付のあるもの。選考委員は鈴木漠・たかとう匡子・時里二郎。応募期間は２０１８年５月１日（火）から２０１８年７月３１日（火）必着。詩集二部を送付。正賞賞状・副賞五十万円。送付・応募先は芦屋市精道町７-６　芦屋市教育委員会　生涯学習課　富田砕花賞係。詳細は電話０７９７-３８-２０９１まで。

※神戸文学館の会場内の雰囲気を知ってもらうために、作品は任意で掲載しています。

第７回ポエム＆アートコレクション 2018 の作品数々

◇会員の発行書

２０１７年１２月～２０１８年７月

たかとう匡子評論集『私の女性詩人ノートⅡ』思潮社
以倉紘平選詩集『駅に着くとサーラの木があった』編集工房ノア
福田知子詩集『あけやらぬ　みずのゆめ』港の人
山本眞弓詩集『五月の食卓』澪標
佐藤勝太詩集『雑草の詩』竹林館
北岡武司詩集『鳩は丸い目で』和光出版
香山雅代詩集『雁の使い』砂子屋書房
たかとう匡子現代詩文庫２３９『たかとう匡子詩集』思潮社
以倉紘平エッセイ集『気まぐれなペンー「アリゼ」船便り』編集工房ノア

◇会員の詩誌

２０１７年１２月～２０１８年７月

個人誌・鳶が城便り（足立勝歳）
鳥７３号（足立勝歳）
多島海３３号（江口節）
木想７号・８号（高橋冨美子）
ア・テンポ５２号・５３号（玉井洋子）
現代詩神戸２５９号～２６１号（永井ますみ）
Messier５０号・５１号（香山雅代）
アリゼ１８２号～１８５号（以倉紘平）
鶺鴒９号（江口節）
プラタナス６３号（神戸詩人会議　玉川侑香）
どぅるかまら２３号（北岡武司）
Poetry Edging３９・４０（寺田操）
別嬢１０５号（高橋夏男）
ガーネット８４号（神尾和寿）
花筏３２号（住吉千代美）
まほろば４４号（たかはらおさむ）
時刻表３号（たかとう匡子）
Oct5号（高谷和幸）
河口からⅣ（季村敏夫）
風の音１６号（風の音社　野口幸雄）
月刊めらんじゅ１２９号～１３４号（大橋愛由等）

※会員の発行書と会員の詩誌の発行年月に関しては若干差異がありますが、ご了承お願いいたします。もし漏れ等がありましたら事務局に連絡を下さい。

◇会員の動静

・たかとう匡子
第１８回日本詩人クラブ詩界賞授賞。『私の女性詩ノートⅡ』（思潮社）により。

・中堂けい子
詩集『ニューシーズンズ』（思潮社）出版記念会　２月２５日　スペイン料理店・カルメン

・玉川侑香
日本詩人クラブ第２１回関西大会５月１２日（大阪・ホテルアウィーナ）において、朗読と音楽（風のたより）。詩集『戦争を食らう　軍属・深見三郎戦中記』（風来舎）より

・山本眞弓
詩集『５月の食卓』（澪標）出版記念会　５月２０日　ホテル北野プラザ六甲荘

・福田知子
詩集『あけやらぬ　みずのゆめ』（港の人）出版記念会　６月２４日　スペイン料理店・カルメン

・時里二郎
時里二郎の詩と高橋悠治の作曲による『風ぐるま２』のＣＤが５月に発売。「風ぐるま」は作曲家・ピアニストの高橋悠治さんと歌手の波多野睦美さん、サキソフォン奏者の栃尾克樹さんの三人のユニット。作品「納戸の夢　あるいは　夢のもつれ」、「鳥のカタコト　島のカタコト」

・玉井洋子
詩集『霾る』（澪標）により、「芸術文化団体・半どんの会〈現代芸術賞〉」受賞。

◇退会

今猿人・油井和代・豊崎美夜・井上哲哉

◇入会

・高木敏克　〒６５３－０８２７　神戸市長田区上池田３の１８の７
電話０７８（６４７）０４１０
１９４７年神戸市生まれ。小説家。同人誌「漿」にて、詩、短編小説発表。小説集に『暗箱の中のなめらかな回転』（編集工房ノア）、『白い迷路から』（白地社）。航跡舎代表。

◇イベント案内

現代詩セミナーin 神戸２０１８
主催　現代詩セミナーin 神戸実行委員会
１１月２４日(土)１２時３０分～１７時３０分
神戸女子大学教育センター５階特別講義室（神戸市中央区中山手通り２の２３の１）
「今、詩に求められるもの、求めるもの～言語芸術のさまざまなジャンルのはざまから詩の再生を模索する」
・講演会　齋藤愼爾　・シンポジューム
・自作詩朗読会
連絡先　倉橋健一・今野和代（事務局）
電話　０９０－１１４９－４０４２
ＦＡＸ　０６－６３３８－５７９６

★兵庫県現代詩協会事務局／神田さよ
〒663-8006　西宮市段上町６－１４－４
電話　０７９８（５３）０６８６
★会計／野口幸雄
〒567-0846　神戸市灘区岩屋北町４－４－５－９０２
★会報編集／大西隆志
〒670-0061　姫路市西今宿３丁目１番９の７０２
★印刷所／社会福祉法人　新生会　新生会作業所
〒663-8006　西宮市染殿段町２－１１